

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	青山 聡
2. 審査委員	主査：（岡山大学 教授） 高塚 成信 副主査：（上越教育大学 教授） 大場 浩正 委員：（兵庫教育大学 教授） 吉田 達弘 委員：（兵庫教育大学 教授） 谷 明信 委員：（鳴門教育大学 教授） 山森 直人
3. 論文題目	A Study of the Effectiveness of Written Corrective Feedback on L2 Development by Japanese Learners of English （日本人英語学習者の第2言語発達を促す書き言葉による訂正フィードバックに関する研究）
4. 審査結果の要旨	<p>論文提出による学位申請者 青山 聡 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：令和2年1月25日（土） 午前11時10分～午後12時10分 場所：兵庫教育大学 大阪サテライト4階 402号室</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>本論文は、以下の8章から構成されている。</p> <p>第1章 序論 第2章 先行研究のまとめ 第3章 調査1：訂正フィードバックの書き直しと新しい英作文課題での効果 第4章 調査2：焦点化・非焦点化訂正フィードバックの異なる課題での効果 第5章 調査3：訂正フィードバックの明示的・暗示的知識への効果 第6章 調査4：訂正フィードバックの文法項目熟達度による効果 第7章 調査5：訂正フィードバックと書き直しに対する学習者の態度 第8章 結論 引用参考文献・付録</p>

本論文は、日本人英語学習者（高校生）の英語を書くことにおける文法的誤りに対して、どのような訂正フィードバックを与えると、第2言語発達に最も効果があるのかを、学習者の英語熟達度別に特定することを目的としたものである。学習者の誤りをどのように訂正するのか、またそれがどのように言語発達に影響を及ぼすのかということは、言語指導実践上及び言語習得研究上の重要な課題であり、調査研究の意義は大きい。

訂正フィードバックには、直接的訂正フィードバック（正しい形式を与える）、間接的訂正フィードバック（誤りだということだけ示唆する）及びメタ言語的訂正フィードバック（文法的説明を与える）があり、それぞれ特定の文法項目に限定して与えられるかどうかによって焦点化訂正フィードバックと非焦点化訂正フィードバックに分けることができる。

本論文は、それら訂正フィードバックの第2言語発達への相対的効果を、英作文の書き直し、新しい英作文、及び文法性判断テストなどを用いて、全般的な英語熟達度及び特定の文法項目における熟達度別に調査したものである。

第1章では、訂正フィードバックの定義及び訂正フィードバックが持つ否定証拠、気づきや仮説形成・検証機能が言語発達に与える影響について触れ、言語習得研究と指導実践の視点から、訂正フィードバックに焦点を当てた研究の必要性が述べられている。

第2章では、訂正フィードバックの言語発達に対する相対的効果を検証したこれまでの先行研究の課題を明確にした上で、それぞれの課題を解決するため、調査を行うことの必要性が述べられている。

第3章（調査1）では、直接的訂正フィードバックとメタ言語的訂正フィードバックの書き直しと新しい英作文における相対的効果が検証されている。結果は、英語熟達度高位群では、書き直しについては両フィードバックとも効果があったが、新しい英作文においては相対的優位性は観察されず、低位群では、直接的訂正フィードバックは書き直しのみに効果があったが、メタ言語的訂正フィードバックは、新しい英作文での正確さも向上させたことが明らかになった。

第4章（調査2）では、焦点化直接的訂正フィードバック、非焦点化直接的訂正フィードバック、焦点化メタ言語的訂正フィードバックの言語発達への相対的効果が測定された。英語熟達度高位群では、特定のフィードバックに相対的優位性は観察されなかったが、低位群では、焦点化メタ言語的訂正フィードバックが最も効果があった。

第5章（調査3）では、直接的訂正フィードバックとメタ言語的訂正フィードバックが明示的知識と暗示的知識に与える相対的効果が測定されている。英語熟達度に関係なく、どちらのフィードバックも暗示的知識には効果がなかった。明示的知識については、英語熟達度高位群ではメタ言語的訂正フィードバックが短期・長期ともに効果があった。低位群では、両フィードバック共に短期的な効果は見られたが、メタ言語的訂正フィードバックのみが長期の効果を持っていた。

第6章（調査4）では、直接的訂正フィードバック、間接的訂正フィードバック、メタ言語的訂正フィードバックの言語発達への相対的効果が、特定の文法項目に対する熟達度（項目別熟達度）別に測定されている。項目別熟達度高位群は直接的訂正フィードバックよりも間接的訂正フィードバックやメタ言語的訂正フィードバックが、中位群では間接的訂正フィードバックよりも直接的訂正フィードバックやメタ言語的訂正フィードバックが、また、低位群では直接的訂正フィードバックよりもメタ言語的訂正フィードバックが効果があった。

第7章（調査5）では、学習者の訂正フィードバックに対する態度をアンケート調査により明らかにし、その結果と調査1から4で明らかになった熟達度別の訂正フィードバックの効果との関連について考察されている。学習者は、熟達度に関わらず、他の学習者からよりも教師からの訂正フィードバックを求めており、直接的訂正フィードバックよりも、間接的訂正フィードバックを好み、焦点化訂正フィードバックよりも非焦点化訂正フィードバックを求めていることが明らかになった。

第8章では、以上の調査結果より、英語熟達度上位群にはどのタイプの訂正フィードバックも効果があり、低位群にはメタ言語的訂正フィードバックが最も効果があることが分かった。教育学的示唆としては、メタ言語的訂正フィードバックを複数回与えることの必要性や訂正フィードバックを通して得られた明示的知識を暗示的知識に変えるために他の言語活動と関連付ける必要性等が述べられている。また、メタ言語的フィードバックの質的向上のための調査をすることなど、今後の研究への示唆が述べられている。

2. 審査経過

（1）論文の独創性

本論文の独創性は、これまでの訂正フィードバック研究の課題を明確にした上で、それらを克服する試みが5つの調査を通してなされ、新たな知見を得たことにある。とりわけ、（1）学習者内要因である英語熟達度や項目別熟達度によって、適切な訂正フィードバックの種類が異なること、（2）熟達度の低い学習者には、メタ言語的訂正フィードバックが有効であること、（3）訂正フィードバックは明示的知識の発達には貢献するが暗示的知識の発達には貢献しないこと、などを明確に示したことが、審査委員に評価された。

（2）論文の発展性

本論文で明らかになった、英語熟達度低位群にとってのメタ言語的訂正フィードバックの重要性は、学習者要因に配慮して、メタ言語的訂正フィードバックの内容をより個別化することの必要性を示唆している。また、学習者は教師からの訂正フィードバックを求めていることが明らかになったが、誤りに対して与えられたメタ言語的訂正フィードバックを複数の学習者同士で協働的に検討するような活動の効果等についても検討を要することなどにおいて、論文の発展性が期待できるとされた。

（3）学校教育実践への貢献

本論文は、言語指導実践家として、学習者の誤りをどう訂正することが彼らの言語発達を促すのかという切実な問いからスタートしており、（1）熟達度の低い学習者には、メタ言語的訂正フィードバック、とりわけ特定の文法項目に限定した焦点化フィードバックが有効であること、（2）訂正フィードバックによって得られた明示的知識を暗示的知識に変容させるためには、他の言語活動と関連付ける必要があること、などの知見は、教育実践に大きな貢献となると考えられる。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、青山 聡 の提出した学位論文が、博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。